

企画・編集にあたって

W. オスラー博士は“Medicine is an art based on science”と唱えました。さらに彼は、医療における humanity の重要性も指摘しています。その精神については多くの方々が「われわれ臨床医は十分な技量 (art) を駆使し、科学 (science) に基づいた医学・医療を人間性あふれる心を持って行うべきである」と説いています。

“Science”という面については、近年、質の高い医療を目指すために evidence based medicine (EBM) が提唱されています。また、限られた医療資源を有効に用いて高いレベルの医療を実践するために各疾患のガイドラインが作成されてきました。実際の臨床では1例1例が異なり画一的でないことは論を俟ちませんが、多数例の報告、特に無作為対照比較試験など高い根拠に基づく医療はますます重要となります。

その医療を実践するためには優れた“art”が望まれます。外科学の一分野でもある泌尿器科学では特にこの“art”が重要です。オスラー先生の説いた“art”には優れたピアニストによる鍵盤のエレガントなタッチ、あるいは優れたバイオリニストによる素晴らしい弦のふれ方などを連想させる臨床医としての humanity あふれる高い技量を求めているのではないのでしょうか。

日常診療の中で“art”，すなわち泌尿器科医としての優れた技量を持つとともに、それを維持、そして高めることは、われわれ臨床医に科せられた使命であります。この臨床医としての技量は、臨床トレーニングのなかで指導医や教科書から学ぶことができます。しかしながら、そこでは処置や手術の1つ1つの

ステップ、特にトラブルの対処法については教科書からは読み取ることが困難な点も少なくありません。

そこで本年度の増刊号は「泌尿器科処置・手術とトラブル対処法」を企画し、上に述べましたいわゆる“art”の面に焦点を当てました。われわれが時々遭遇するトラブルとその対処法、あるいはトラブルを引き起こさないコツなど、いわゆる surgical tips について泌尿器科診療の第一線の先生方に Q & A 方式で記載していただきました。いずれの項目も泌尿器科医であれば一度は経験、あるいは自ら経験せずとも話には聞いたことのあるような事象です。このような場面に遭遇したときに泌尿器科医としての“art”が発揮されると思います。若い先生方には、日常診療において本書に記述された内容が大いに参考になることを願っています。また、ベテランの先生方には、本書の内容とご自身の対応の仕方とを比較していただければ幸いです。執筆にあたられました先生方に深く感謝申し上げます。

なお、本増刊号の企画に当たっては、影林頼明（県立奈良病院）、加藤司顯（多摩北部医療センター）、関田信之（公立長生病院）、高岩正至（米沢市立病院）、塚晴俊（市立長浜病院）、波多野孝史（東京慈恵会医科大学附属柏病院）、堀田浩貴（北海道済生会小樽病院）、右田敦（元 八代総合病院）、森山浩之（尾道総合病院）の各先生にご協力いただきました。記して、お礼申し上げます。

（村井 勝）